

原之夫 『ふたつの街』

坂口博

作者の原之夫は、昨二〇〇三年二月二四日、長崎市内の病院で亡くなった。享年六十五歳。早すぎる晩年の約二年間、故郷に戻つての闘病生活を続けてきたことも、また逝去の直前に『銅版画作品集』が刊行されたことも、このごろ知つた次第である。作者の紹介から始めよう。

原之夫（はら・ゆきお）一九三八（昭和一三）年三月三十一日、長崎市生まれ。画家・小説家。四五年八月、長崎市竹の久保町の自宅で被爆。長崎西高を卒業後、五六年四月に佐賀大学教育学部特設美術科入学。五八年、同大学を中退して東京へ出る。六八年から個展、グループ展などで作品を発表。七三年、銅版画を始める。七八年、日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ美術家会議（IAAFA）、針生一郎議長）に参加、事務局長も務める。八二年、新日本文学会に入会し事務局も関わり、「被爆の底で」（一九六・五）を発表する。東京都内から千葉県松戸市に住んでいた。著書には、『悲しい顔のマリア』（汐文社、九一・一一）、長崎平和絵本シリーズ②、『ふたつの街』（新読書社、九六・七）、『被爆の底で』（新読書社、九七・八）、『原之夫銅版画作品集』（同時代社、〇三・一〇）がある。近く、「新日本文学」などに発表した短篇小説を一冊にまと

とめる予定もあるという。

『銅版画作品集』刊行前後には、地元長崎を中心に、いろいろとTVや新聞報道がされていたようだ。それらは、本年二月十三日に東京都世田谷区の砧区民会館で開催された「原之夫さんを偲ぶ会」の模様を伝えるホームページで閲覧できる。

(http://homepage2.nifty.com/kaivoutae/startup/hara_yukio.htm)

刊行された小説は二篇。いずれも作者自身と思われる男をモデルにした連作である。「ふたつの街」は、長崎を離れた大学時代の恋愛を、「被爆の底で」は、東京で暮らす夫婦と、長崎の父母や姉の家族の有り様を描いたものである。前での恋人は広島島の被爆者、後では妻も長崎の被爆者に設定されていた。ここでは、「ふたつの街」を取り上げたい。

「城跡の石段を登りながら、大学をやめて上京する前に一度あの浦上の廃墟を見ておこう、と隆は思った」で、じつさいの物語は始まる。主人公の名前は長井隆、「長崎の原爆に関する著述で有名になった永井隆博士」と一字違いの同姓同名。「だからそのことがいやだった。隆の母は永井博士のことが好きでなかった。永井博士の言動をむしろ蔑んでさえいたし、憎悪さえしていた。なぜなら、かれの言うこと書くことは、被爆がひとびとの心と体に突き立てた真実から、遥かに遠いというのだ。永井博士は長崎に原爆が落とされたのは神の思召しであった、とさえ言ってはばからないのだ。そう言ってしまうことで、原爆を落とした人間たちの責任を一切不問に付してしまおう、というのである。人々に知らされている長崎には、真実や重大な意味が隠蔽されている、と隆でさえ思っている。あの町はいつも美しい衣装を着せられて

いる」。

そうした「あの町」長崎に対比されるのが、「退屈に広がる田園の中心に位置し、楠の太木と清らかな水の流れの間にひっそりと息づく質素な町並み」をもち、「時の流れから遠くとり残されてしまい、過ぎ去った時間の中に眠り込み、死んでしまったようにひっそりと静まりかえっている」、「この町」である。明らかに、佐賀県の県庁所在都市、佐賀大学のある佐賀の町を描きながら、この小説のなかで、具体的な地名はいっさい示されない（恋人の川上八千代に誘われて、夕刻に「蓮池公園」を訪ねる場面があるが、ここだけは例外に属する）。「この町」は、「あの焼けただれた丘の上に建つ、瓦解した赤レンガの御堂に比べれば、やさしさと甘美さに満ちている」というが、果たしてそうなのだろうか。

原之夫は長崎での被爆の情景を次のように描き出す。

あの日は朝から何回もサイレンが鳴つたりして、でもあの時間には警戒警報しか出ていなかった。二階にいた母が突然、敵機がきた、とB29の爆音を聞きつけて、階段を転がるように駆け降りてきた。その瞬間激烈な閃光が視界を突き刺した。暗黒の世界の中で息をひそめていた。なにもない世界。闇はどれくらい続いただろう。いや、闇が実際に存在したのか、それともあの激烈な閃光のために視力をまったく失っていたのか、それとも隆の肉体を貫通したであろう総量で一キロワットの放射線のためにいっさいの知覚を失っていたのか、それすら分からない。確かにあのときはなにも見えなかったし、なにもなかった。いっさいの知覚を失っていた。自分自身がどこにもいなかったのかも知れない。闇は静かに漆黒の幕が

あがつていくように去っていった。土壁が崩落して砂塵が充

満していた。ひどくかび臭い匂いが鼻や口を塞いだ。隆は身

近にあったはずの防空頭巾を手探りで探し当て、頭に被った。

その後、竹の久保町内の「山の斜面の防空壕」に避難するのだ

が、「隆の記憶は、家の中から表に這い出して、壊れた向かい側の屋根を乗り越えるあたりから突然ぶつりと途切れて」いる。

防空壕からは「眼下の火葬場が燃えていた。……避病院と呼ば

れていた伝染病院が火葬場のすぐ下手にあり、激しい勢いで煙を吹

き上げだした。その煙の向こうに町のあちこちから燃えさかる炎

と煙が龍巻のように立ち上っている。山で四方を囲まれた箱庭の

ような町は、ぞつとするほど美しい火災と黒々とした煙の渦に飲

み込まれて」いく、そうした長崎被災の様相が見えた。「悪夢の

ように、それでいて身の毛のよだつほど美しく燃えさかる箱庭の

町を、防空壕にたどり着いた者たちは、なす術もなく、ただ惚け

て眺めていた」のだった。

失われていた兄との逃避行の記憶は、敗戦後、進駐軍の米兵た

ちに連れ去られ、溺死体で発見された姉の記憶と共に、夢のなか

に甦つて語られる。ふだんは登攀できないような急な崖をよじ登

つたというのだ。

隆おまえ先に登れ。

ばってん兄ちゃん、この崖は急かよ。おつちやくるよ。

なんば言ひよるとか、ほら橋本さんの火のこつちに近寄つ

て来よるじゃなかか。

ばってん、ばってん、こわか。

おいが泣きべそかいて言ひよつたら、兄ちゃんが腹かいて、

ばしつ、てびんたば食らわしたと。おいもしよんなかけん、泣きながら崖ば登りはじめたと。こわかったと。あそこの崖は赤土やけん、泥のぞろぞろ崩るつとき。

「谷口さんとおおばさん」に手を引つ張られて、崖の上に辿りつき、兄から指摘されて防空頭巾ではなく、座布団を被つていたことや、背中の負傷に、ようやく気付く。

ところで、隆が「この町」に來た経緯には屈折がある。「最初この町の大学にくる予定はなかった。……高校の三年のときの担任に薦められて、急遽、予備のためにということを受けてみたのだ。……だが隆はいまの大学に受かると、なんの躊躇もなくあの町の大学を一蹴して、この町にやつてきてしまったのだ。この古びた町ではすべてのものたちが、自分をやさしく受け入れてくれるように思えた」からだだった。「隆は長崎の大学にも受かつていたから、わざわざこの町の大学へ来ることはなかった」ともされる。要するに、「あの町」から逃げ出せるなら、どこでもよかったということになる。いや、被爆の瞬間から、ずっと逃避行は続いているのだ。

真夏には水面の菱の実を求めながら、小さな箱の舟が白い手拭いを被つた農婦を乗せて、青々と茂つた水草をわけて進む。名も知らぬ水辺のくさや水蓮の葉に、糸のようにか細い糸きりトンボが透明な翅を震わせながらとまる。赤や黄色や黒の艶やかな色をした大小のトンボは思い思いの高さで飛びびらい、行きかたつて、まぶしい日差しの中にキラキラ翅を光らせる。……その堀や城跡のある、町のずっと外側には地平線の遙か遠く田園が続いて、その上に無限に広がる紺碧の空に、

熱気を孕んだ積乱雲が毎日日課のようにぬつと顔を出す。……全身真っ黒に日焼けした裸の子どもたちは灌漑用の堤や、田んぼの中のアちこちに散らばつた溜め池につかつて遊ぶ。

この情景描写など、ちよつど「裸の子どもたち」の一人として、同じ時期に、同じ土地で過ごした私には、きわめて感動的に響く。

そう、私にも堀割(クリーク)と糸トンボや川トンボは、それにカチガラス(かさぎさき)は印象的に記憶されているのだ。そして、これだけは経験的に断言できるのだが、どんなに外見はのどかな田舎町に見えようとも、その内側ではさまざま悲喜劇が、被爆地「長崎」と同じように進行しているのだ。おそらく作者は、そのことを理解しながらも、具体的に把握できないがゆえに、あえて「佐賀」という地名を避けたのだろう。「あの町」「この町」とふたつの町は対比されているようにいて、対照になつていない。「この町」は実在の町ではなく、作者の心象にだけ存在する。「水はくれんですか、誰か水ばくれんですか」と叫ぶ人びとは、「清らかな水の流れ」には不在である。「さまざまの水の姿が隆を捉え、魅了」したにせよ、作者にとつても、作中の隆にとつても、「この町」は、風景のみの架空の町に過ぎない。

ところで、挿話的に触れられる前衛美術団体「九州派」の動向なども、特設美術科の画学生に与えた影響として興味深いものもある。

教授の石田さんが日展の傘下の東光会の幹部会員で、学生たちもおおぜいその会に出品したり、メンバーだつたりする。……山本さんは自分が東光会に出しながら、その会に出している仲間にドンコー派、すなわち鈍行派という蔑称をつけて

楽しんでる。そして守山さんの仲間たちが突然街頭に素っ裸で現れて、踊りのような、パントマイムのようなことをして暴れ回っているというので、九州派ではなく急襲派だといつて学生たちを笑わせている。

この「石田教授」のモデルは、石本秀雄だろう。彼の略歴は次のようになっている。「一九〇八明治四二—八六(昭和六〇)。長崎市に生まれる。昭和三年東京美術学校教師範科入学。同五年第五回一九三〇年協会展、第一美術協会展に入選。翌六年美校卒業。同年小城中学校に赴任する。同九年第二回東光展に出品。同一三年東光会会員となる。佐賀高等女学校、佐賀師範学校をへて、同二四年佐賀大学教授となる。同二六年第七回日展で特選受賞。同三五年第三回日展で菊華賞受賞。同三八年日展会員となる。翌年渡欧。同四三年佐賀美術協会理事長。同四九年佐賀大学退官。同五三年第一〇回日展で会員賞受賞。同五五年日展評議員、東光会理事となる。同五九年日展参与。」(第一回福岡・佐賀・長崎三県合同企画展 西洋絵画への挑戦(図録) 一九九一年)

特設美術科は、佐賀大学のほかに、北海道学芸・岩手・岡山・高知などの国立大学教育学部に、一九五三年に設置されたようだ。全国的に不足していた新制高校・中学の美術教師養成を主たる目的としたものである。その側面では将来の安定した生活は、ほぼ保証されていた。「大学を卒業し、この筑紫野の周辺で、かさぎたちのように安穩として生きていけた」のだった。

一方、既にそのような生き方へ対抗する運動も見られたのだ。また、カチガラスだって、決して安穩とは生きていなかった。日、巣作りをめぐる人間との格闘を演じていた。

一九五七年七月下旬とされる「九州派(別称「Q」)」の結成、八月の福岡市岩田屋デパートでの「グループQ十八人展」、機関誌「九州派」の創刊(五七・九)を経て、十一月には「第二回九州派街頭展」を開催する。福岡県庁西側大通り壁面を使用したこの展覧会は、「菊畑(茂久馬)、山内(重太郎)らは、胸に「Q」と書いたドンゴロス(麻袋)を着て石油缶を叩いて街頭宣伝パレードを行った(天神県庁横—岩田屋—呉服町大丸—東中洲水上公園)。このパレードのプラカードには「グループQ・詩科 アンフォルメル野外展」という文字が掲げられていたように本展も「ペルソナ展」(一九五六年一月開催の詩画展)同様の詩画展であった。……パレード最終地の東中洲水上公園では相撲大会を開いて氣勢をあげた(黒田雷児編「年表」—田代俊一郎「駆け抜けた前衛—九州派とその時代」花書院、九六・三)と伝えられる。

「ふたつの街」では、地名と同じく年代も明記されていない。一九五四年三月の「第五福龍丸事件」から三年目、したがって作者自身の大学二年目、一九五七年一月であることは、「裸で通りを駆け回ったり、どこからかき集めてきた家具や、楽器などを叩き割って展覧会場に運びこみ、山積みにする」という「九州派」の動向によっても符合する。

この作品は、両著の解説を書いた小林孝吉(『存在と自由—文学半世紀の経験』—皓星社、九七・一〇)にも「核と文学」の題名で収録)も指摘するように、「同時代の青春」を画家らしいすぐれた描写力でもって書いた、得難い小説となっている。しかしながら、青春固有のみずみずしさとともに、その身勝手さも、指摘せざるを得ない。

恋人・八千代は語りかける。「自分のことを分かるように話してもいいのに、あなたに自分のことを分かって欲しいなど言い続けてごめんさい。わたしのことを随分身勝手な人間だと思っただことでしょうかね。」「わたしがあなたの足手まといになつてしまいたくはないのです。いまのままでいるとあなたを駄目にしてしまうでしょう。そしてそのことがわたし自身まで駄目にしてしまうと思うのです。だからもうさようならを言います」。それに對して、隆は考える。「なぜ自分とともに生きることが願わなかつたのだろう。自分ともになにかを創りだしてゆくことを願つてはくれなかつたのだろう。」「人生の上に、はじめから不可能をしか見ることができず、断念して生きることしか知らないように見える」。

もちろん、誰でも、青春時代に限らず、そのような独善的な行動をする。ことに恋愛においては、お互いに顕著にあらわれる。そのことが悪いわけではない。要は、それを自覚し、「自己」からの方向を「相手（他者）」からに変えることができるか否かにあろう。この分岐点で、作者に若干の甘さを感じないわけにはいかないのだ。どこまでも逃げ続けている。ここで、「この町」で闘わない限り、その逃避行は終わらないというのに。作中で恋人からも「甘えんぼのキミ」と指摘されるように、この「甘さ」は文学作品として見るならば、致命的な欠陥となる。

小林孝吉は、「原之夫は被爆の底で、ひたすら妻を待つことから、妻の苦しみのただなかへ、夫婦の闇の深部へ、そして被爆の地・長崎へ——、そこに被爆小説三部作の第三部となる《被爆の底から》のテーマがある。被爆の町・長崎へと帰還することは、

同時に、再びあの清らかな水の流れる城下町・「かささぎの町」へ、広島での被爆の傷痕を奥深くひめた八千代の存在の闇へと向かうことを意味するのだ。……（核）そのものの闇へと立ち向かうことにつながっている」として、「被爆の底で」から、「被爆の底から」への方向性を示唆されていたが、遂に「被爆の底から」は書かれることはなかつた。なお、小林は『記憶と文学』（御茶の水書房、〇三・九）では、林京子と原民喜を取り上げている。

きわめて肯定的な、「ともに生きていくことの喜びを語りあえる日」を、「相手」の立場から想定できるなら、恋人たちの運命はまた違つていたはずなのに、作者は自身の過去の記憶に束縛されたままである。作品の展開と、現実の展開が混在し錯綜しているのであろう。魅力的に描かれた恋人・八千代については、「このとき、隆は八千代の未来にどんな運命が待ちかまえていたか、知る由もなかつた」という謎めいた文言で終える。連作からはその行方を、明確に見出せないままである。これも、作品の「甘さ」として不満が残る箇所であらう。

ほかにも例えば、永井隆批判にしても、小説のなかの時間と、書いている時点との違いを明確にしないかぎり、具体的なものとはなりえない。後の視点なら何でもいえるというのでは、決して批判として実りあるものではない。庶民のなかにくすぶる「真実や重大な意味が隠蔽されている。いつも美しい衣装を着せられている」という不満に對して、同感・同意するだけでなく、なぜそうなつたかを解明し、隠された「事実」や出来事を明らかにするに留まらず、代わる物語を再生する必要があるだろう。文学の課題は、そこまでの射程をもつて歩んで行きたい。